

朝のこない夜はない

顔かおにはその人ひとの

内面ないめんがで出てきます

功徳くどくを積つんで

内面ないめんを磨みがきましよう

山首 鈴木正修

【ナンジャモンジャ】の花（ヒトツバタゴ）

## 和顔施わげんせ

### 内面が顔に出るないめんかおで

人間の顔は、その人のそれまでの行ないや心が出るものです。アメリカの元大統領リンカーンが大統領になった時ある側近から、この男を大臣にしてほしいと言われましたが、リンカーンは会うなり「ダメだ。顔が悪い」と言いました。側近が「顔は自分のせいではないです」と言うところ、リンカーンは「男は四十になったら自分の顔に責任を持たなければいけ

ない。四十過ぎてこんな子どものような顔をしたやつはダメだ」と言い、あつさり断った、という話は有名です。

JAL（日本航空）を再生された稲盛和夫さんは、

「私は職人さんの顔を見るのが大好きだ。この道五十年、六十年という職人さんのあの年輪の刻まれた顔を見るのが大好きだ。男はみんなああいう顔にならないといけない」と言っておられます。たぶん、

リンカーンもそういうことが言いたかったのだと思います。

アメリカのヘレナ・ルビンシュタインという女性も、面白いことを言ってみえます。

「女の顔は三十までは神様の授けてくれた顔。四十を過ぎたら自分で稼いだ顔」三十までは若さで持つが、四十を過ぎると内面的なものが出てくるということです。

—— 信頼を得るために顔を変える ——

「顔」の話で面白いのが佐賀鍋島藩の

「葉隠」の語り部・山本常朝という人です。この人は非常にうんちくのある話をする。「葉隠」の中で語っています。

十三歳で元服をした途端「利口そうな顔が悪い。利発そうな顔をしているが、あのような顔つきの者はだいたいが家をダメにする。お殿様もたぶんああいう顔はお嫌いだ」と周りからさんさん批判をされ、一年間家に引きこもりになつたそうです。しかし、実際は落ち込んで引きこもりになつたのではなく、顔を変えようとして一年間引きこもり、努力をしたのです。毎日鏡を見て、少しでも利

口ぶつたところが無くなるように努力をしたのです。そうして一年経ち、もういいだろうと外に出たところ悪口を言っていた藩士たちが「なんか病氣上がり疲れ切ったような顔をしているな」と言っただけです。それを聞いて「ああ、良かった。もうこれで外に出ても大丈夫だ」と安心をしましたと言います。

後に、弟子たちに「利発さが顔に出るようではまだまだ人の信用を受けるといふわけにはいけません。総じて風体というもの、しっかりと落ち着いていて静かであることが上々である」と言ってみえ

ます。

### 和顔施に務める

「宮本武蔵」や「新平家物語」の著者・吉川英治さんは、あることをきっかけに山本常朝のように顔を作るようになったと言います。

朝日新聞の論説委員をしておられた扇谷正造さんが、週刊朝日の編集長をしていた時、吉川英治さんは「新平家物語」を連載していただきました。吉川英治さんといえど大作家ですから、編集長自ら原稿を受け取りに行っていました。一回の原稿

が四百字詰め（じぶつ）の原稿用紙（げんこうようし）で二十五枚（まい）だつたそうです。締め切り（しめきり）の日は必ず（かならず）徹夜（てつや）になり、徹夜明け（てつやあけ）の吉川（よしかわ）さんのもとへ原稿（げんこう）を取り（と）に行く（い）と、吉川（よしかわ）さんは本（ほん）当（とう）に疲（つか）れ切（き）った様子（ようす）でした。原稿（げんこう）を書（か）くのに魂（たましい）を入（い）れすぎて、主人公（しゅじんこう）に同化（どうか）してしまつたの（の）かもしれ（し）ません。たとえ（たと）えば清盛（きよもり）が熱病（ねつびょう）で死ぬ（し）場面（ばめん）になると、本（ほん）当（とう）に自（じ）分（ぶん）にも熱（ねつ）が（が）出（で）てきて、倒（たお）れて横（よこ）にな（な）りながら書（か）か（か）れた（ら）そうです。また、木曾（きよ）義仲（よしなかつ）の最（さい）期（ご）の場（ば）面（めん）では、本（ほん）当（とう）に辛（つら）そう（そう）で、暗（くら）い顔（かお）にな（な）つて出（で）てみ（み）えて原稿（げんこう）を渡（わた）された（ら）そうです。その吉川（よしかわ）さん（さん）に晩年（ばんねん）、香屋（かや）子（こ）ちゃん（ちゃん）とい

う（う）か（か）わ（わ）い（い）い（い）赤（あか）ちゃん（ちゃん）が（が）生（う）ま（ま）れ（れ）ま（ま）し（し）た（た）。年（とし）を取（と）つ（つ）て（て）か（か）ら（ら）の（の）子（こ）ど（ど）も（も）は（は）本（ほん）当（とう）に（に）か（か）わ（わ）い（い）と（と）い（い）ま（ま）す（す）が（が）、吉川（よしかわ）さん（さん）も（も）例（れい）外（がい）で（で）な（な）く（く）「香屋（かや）子（こ）が（が）嫁（よめ）に（に）行（い）く（く）ま（ま）で（で）わ（わ）し（し）は（は）生（い）き（き）て（て）お（お）ら（ら）れ（れ）る（る）か（か）な（な）あ」と時々（ときとき）言（い）わ（わ）れ（れ）る（る）ので（ので）扇（おん）谷（や）さん（さん）が（が）、「先（せん）生（せい）、少（すこ）し（し）お（お）休（やす）み（み）に（に）な（な）つ（つ）たら（ら）い（い）か（か）が（が）で（で）す（す）か」と言（い）う（う）と、吉川（よしかわ）さん（さん）は（は）「一（ひと）人（り）で（で）も（も）僕（ぼく）の（の）小（せつ）説（せつ）を（を）読（よ）ん（ん）で（で）く（く）れ（れ）る（る）読（どく）者（しゃ）が（が）い（い）る（る）間（あいだ）は（は）絶（ぜつ）対（たい）休（やす）ま（ま）な（な）い」と言（い）わ（わ）れ（れ）た（ら）そ（そ）う（う）で（で）す（す）。

ある（ある）時（とき）、二（に）週（しゅう）間（かん）く（く）ら（ら）い（い）所（しよ）用（よう）で（で）関（かん）西（さい）から（から）九（きゅう）州（しゅう）方（ほう）面（めん）へ扇（おん）谷（や）さん（さん）が（が）出（し）張（ちやう）し（し）て（て）、吉川（よしかわ）さん（さん）の（の）原（げん）稿（こう）を（を）取（と）り（り）に（に）行（い）か（か）な（な）か（か）つ（つ）た（た）こ（こ）が（が）あ

ったそうですが、帰って久しぶりに吉川さんのところへ原稿を取りに行く、すぐくさわやかな顔で出て来られたそうです。そこで扇谷さんが「先生、昨夜は徹夜ではなかったのですか」と聞くと「徹夜したよ」と言われました。いつもと様子が違うのでどうしたのだろうと思、後日、奥さんに聞いてみたそうです。すると「実は主人が、扇谷さんに心配させて気の毒だったと言、これから必ず扇谷さんに会う前に朝、鏡の前で顔を直してから会うことにした」と言われたのだそうです。それまでの魂を込めた主人公

と団体になった雰囲気を追い出して、顔を整えてから扇谷さんに会うようにされたのです。それが吉川さんの習性になり、どこへ行くにも、どの人に会うにも必ず鏡を携帯して、鏡がない時にはトイレに入ったり電車の車窓に自分の顔を映して、会う前に必ず顔を直して会うようにされたというのです。

実は吉川さん、若いころは本当に短気で気性の激しい人だったそうです。気に入らない客が来るとすぐに追い返していたそうです。それが、扇谷さんとのやり取りによって変わったのです。仏教でい

うところの「和顔施」をされるようになったのです。

もう一つ吉川さんにまつわる楽しいエピソードがあります。吉川さんは若い頃は非常に苦勞をされました。そのことが自伝小説の「かんかん虫は唄う」という本の中に書いてあります。印刷工時代には百科事典を五十回読んだといわれていますが、扇谷さんはあることをきっかけに「本当に五十回読まれたのかもしれない」と思ったことがあったそうです。吉川さんと扇谷さんが昭和三十年頃、文士の方たちと料亭に行った時のことで

す。お品書に「強肴」と書いてありました。そこには名だたる文士、石川達三、大岡昇平、石坂洋次郎と言った人々がいました。誰もがこれを読むことが出来ませんでした。ある文士は「強い魚だから雷魚かなんかかな」と言い、又ある文士は「ナマズの天ぷらかな」などと冗談を言ったそうです。そこで石坂洋次郎さんが「吉川さん、これなんて読むかご存知ですか」と聞くと、吉川英治さんが「こりしながら「これは、シイザカナ」と読むんですよ。もう料理はひと通り出しましたが、もしお腹がまだ空いている

ようでしたら一皿いかがですか」と強いる料理です。お腹にたまらないような料理が出てくると思います。まあ、今日あたりは蒸しガレイかなんかですかね」と言うとき、本当に蒸しガレイが出てきて、周りの人たちがみんな驚いたということ。その時、扇谷さんは「百科事典を五十回もまんざら嘘ではないな」と思っただけです。

私の法音の連載の題は「朝のこない夜はない」ですが、これは吉川さんの文章から頂いたのです。

吉川さんは若いころ非常に苦勞され、

「いつか私も芽が出る。いつか私も成功出来る」という思いを込めて「朝のこない夜はない」と唱えておられたそうです。晩年、大作家となつて色紙を頼まれると必ず「朝のこない夜はない」と書かれたそうです。いい言葉だと思つて使わせて頂いております。

### 仏になるための六段階

中国の天台大師という偉いお坊さんが、仏になるまでには六段階あるとおっしゃっております。「理即・名字即・觀行即・相似即・分真即・究竟即」といいます。

す。

理即りそくというのは、すべての人は仏性ぶつじょうを持もっていて、理屈りくつの上うえでは仏ほとけになることことが出来できるといことことです。名字即みょうじそくとは、仏教ぶつぎょうを少し勉強べんきょうする段階だんかいに入はいったところ。観行即かんぎょうそくとは、仏教ぶつぎょうを実践じっせんする段階だんかいに入はいっている。相似即そうじそくとは、仏教ぶつぎょうを実践じっせんしていくと姿形すがたかたちが仏さまほとけに似にてくることことです。そして分真即ぶんしんそくで、仏さまほとけの分身ぶんしんと

して働くはたらくようになり、究竟即くきょうそくで仏ほとけになる、  
ということことです。

相似即そうじそくにあるように、善よい行おこないをしして功德くどくを積つんでいくと容姿ようしは自然しぜんに変わかっていくのです。ですから、リンカーンが言ういうように、その人ひとの心こころや行おこないが顔かおに現あらわれることことも本當ほんとうだということことです。